

寛永諸家譜

日下部氏

165

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數		186 (165)
函號	76	1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





朝倉

八本

前場

日下部

日下

寛永詔家系當傳

日下部姓

朝倉

人皇三十七代

孝德天皇

有間皇子

日下部公表年

皇智天皇乃涉宇吳賊と云ひ

耳多子之記 防我乃日下部

淺草文庫

乃姓を考まひり戦場をじふ
考らまら賊徒とありそく執
極く一は好社と考てこれと
まろ赤樹の神也号とる乃社
但る國一は詳一は縁起小
せしる

都牟子

新波乃胡延矣也表父乃郡少郎小

福江とる乃ち胡延一は
已未大郎一は物江と能高の初
一はしりて在江三十一是矣
未の也一は

荒島

藤原乃胡延一は久成戌の年
胡来乃郡大郎一は補江
系良乃希乃とまき在江十五

大正八位下

治長

嫡男 長ありしと良しとす

弘道

周造兼村

亮

貞龜三季 却身部 少将 補

伊 貴元 七年 了りしり

大 成 了 物 河 了 了 九 季

天 平 勝 貞 七 季 小 成 了

國 尚

國 守

延 暦 二 十 季 仍 身 乃 部 大 成 了

從八位上
左
在位十
殿

し
白

祐
貞

弘仁八
朝
耳
少
小
位

安
主

衣
用

茂
並

し
正

在
磨

在
位
十
五

天長八年丁卯

し長

田丸

食増

食継

磯継

磯主

朔月あき朔日このひ少すく頃ころ丁てい乃のち大おほ領りやう小こ領りやう
惣すべ領りやう也なり

貞祐

的てい本ほん領りやう大おほ領りやう小こ領りやう也なり

利実 りじつ

表父郡少佐 やぶのちやうさ

用樹 もちき

柳原貴首 やなぎはらきう

葛在 くわざい

但馬國大目 たにまのくにのみ

親安 ちんあ

井橋守 いのばしり

執友道行判官代表父郡 しやくゆうだうぎょうはんぐわんだい

貴其物耳郡司 ききものみみぐんじ

弘佐 ひろさ

橋安 はしやす

則方 すなはち

表父守落胤 やぶのしりぞりご

則國 すなはちくに

家定 いえさだ

依晴 ヨシハル

権三郎左

清秀 シヨウ

系井和泉母貞

清重 シヨウヘ

清守 シヨウシ

清奉 シヨウホウ

三方印左

清通 シヨウトウ

源初六郎左

清遠

宗高

羽倉と三更 羽倉北祀あり

高信

入高大夫入道

高信平家より高正より

高信と高信の収めを度くこれと清と
いへとも高信これとゆらさざら
同高より白粒此あやまきあり高信
高信の神より高信これと村殿
高信の威にて高信の倉八本并に
御簾乃紋と高信のまは一ツ
本此これと二とくまると三ツ本此
とす

言京ことけ

又次郎

安言やすご

八木新太史やまぎ

相掾さむらひ

言者ことづ

曰二郎

家言いへご

曰次郎

泰家やと

曰又次郎

法名花園く

言家ことけ

曰次郎

法名光通く

家重いえち

曰孫二郎

法名蓮阿あ

言重ことち

重しむ
重しむ

法名曹光院しやうくわん宗栄しゆゑ

重しむ
秀しゆ

法名宗林院しゆりんゑん道通だうつう

頼より
秀しゆ

法名法門院ほつもんゑん宗林しゆりん

年とし
頼より

法名曹源院しやうげんゑん宗林しゆりん

宗しゆ
頼より

法名花年之元前法名大樹院おほじゆゑん宗久しゆきう

貞まこと
重しむ

新あらた宗しゆ法名海川寺うみがはのゐら宗林しゆりん

重信

但馬守

法名法琳院

宗松

俊貞

垣屋吉房九

生玉組

秀吉一子 垣屋氏乃孫也

正長一子 垣屋氏乃孫也

正長一子 病歿也 七十三

法名重信

光政

本庄重

生玉同前

正長一子

東照大権現一子 正長一子

後府一子

同五年 關原 泷陣一子

大坂 泷陣 小泷也

元和二年 江戸より下向して
台座殿より江戸へ去る
日七より病歿 五十一歳

系連

勅十良

安長六年

台座殿より江戸へ去る

寛永九年より

將軍家より江戸へ去る

豊政

忠三郎 生國山城

元和六年

台座殿より江戸へ去る

寛永九年より

將軍家より江戸へ去る

豊次

兵助 生國渡河

寛永六年

將軍家より之を奉りてまうる

廣京

新倉孫左

但別より越あふらり足羽山の庄

黒丸乃殿より一坪一畝黒丸七畝八道

号と 法名中海光姓

正京

をい

高氏とてひ義論ふつふ

高安とて五月二日より死す

氏京

英作

義海よりいふ

寛永十一年十二月廿一日死す歳六十六

貞原

東つ 下野守

義持とてび義友ふつふ

永享八年同五月十九日死す

教原

美作守

義友ふつふ

友原

下野守

寶徳二年十二月廿一日死す

友原

源正盛尉

義政よりつとく軍師にあり
文明三年より越前國とせまふ

氏京

孫太尉

文明三年より官義政の命より
水陸及び舟りしる

貞京

東口 卜野

義当小治人軍師あり

京言

大徳寺

京原

女子

延系

大東門始乃ち義系小あ〜〜母

天文二壬午九月廿四日小誕生

曰廿一年六月十六日義輝乃執養

とつ〜〜命あ〜〜た爲智〜〜なる

義輝みつ〜〜諱乃字と〜〜と判と

く〜〜とをまふ

元龜元年の春職田に長井浦なる

と延治乃をめ志む〜〜河川横山小

木りじく志れとも義系法誓とる

〜〜長井氏と極〜〜信長小あひ

そ〜〜ふり教育る乃う魚徳列

橋井赤坂乃急〜〜とひ〜〜救火

〜〜心しれふ〜〜と長井が小治忠

城恙

曰二壬午十月義系大軍と〜〜

教止小乃り信長大坂と〜〜志賀に

河守城とかまへ森三左衛門守りて
坂本小出強と義京敵討陣と
てあひそくし大い勝利と
しと森氏ととめ数多討捕
聖田乃松洞に長し口直と
先鋒乃將場太直明智光秀兵
三子人といひ兵船乃り中
し聖田小いむじと越あ乃道
三三んととて陣と陣食式大陣

俄に法軍とて一聖田に城と
せり一人をりこととく
捕場ちとら死しと首数百に長
乃陣とてこれとくいと死信
のて率瓦とてとてとせ
三賢の城とて捕獲とて
あやうらんとてとてとて
とつとてとてとてとて
乃とてとて義京真田城とて

後日多しとて流石と守後せしめ
皆田の橋よりおもむくろのちま
れ家客とやうの十二月廿日義系
歸陣

天正九年に長分國乃士率といひ
まゝ小郡より教向といはれり
式了大補謀叛といはれり
小谷に城ありとて入替とて越前
うこれ入られしとて義系母を

きくふりといふ

日年八月十日大將松平
といひて自家と生年四十一

在

信

氏前よりありて後別安信といふ

在重

六葉尉

天正文祿乃あひび

大権現よりつゝとてまはる

長久も公義乃時馬と池と歌陣

よりけり入歌在重が衆きりりる

と時くすてにあやうらんとて

と記りて在重が衆きりりる池

耳馬よりおとをそとをうまけて

味もれ陣よりゆり

大権現津感あつゝこれより安倍に

移りて

大権現岡東沙入園れもきこを安倍

とさるゝきりりあふふらゆり

よりとばすりりら中村式アか指

一氏後別とゆり園詩とえんで

あおりらゆりこれより在重一氏り

了

大権現被別山隠居れとこそ在重小
金トく乃まうまうくさいおあは女め同どう亦
了しきき了しららずずりりれれつつ祿ろくふふててるるに
少すくくりりととああれれももいいままとと道みちととゆゆら
ととああくくははくくととままのの歌うたにに
少すたたるるとと氣きももちちややててび

大権現了りつつ人ひと少すくくととままのの歌うた
元和元年二月九日七十一歳

宣正

藤十郎ふじとうろう筑後守ちくごのり母はははは末すえ高たか石いし見み守もり女むすめ
小田原陣こだけんじん此こゝ時とき宣正のりただりり出でて

台徳院殿たいとくゐん了りつつ人ひと少すくくととままのの歌うた

了し乃のらら 台たい命いのちとと象しやう已い涉せつ使し書しよ

少すくくりりとと

安長五年二月九日筑後守此時

台徳院殿たいとくゐん了りつつ人ひと少すくくととままのの歌うた向むかあありり宣正のりただ

これよあつぐひきそつてつて牧神を
日子渡りもとむに刈田れなりと
なつて歌れ城つらつて城申
ら兵士といつて鉄炮といふら
刈田れれといつてんす宣正を先
渡りもとむら本戸口に
よせぬといつてあひきそつて
城申れ兵士食れう池ららと
りつこれとふせぐ宣正堀乃

下小ほき銃とりつて矢食れう池
乃兵といつて歌銃乃あつて
やら矢食乃う池ら棄ん
宣正これといつてあひきそ
銃乃あつてびきそらら
おつてきびひつてあつて開陣
のら氣あつてあつて銃乃あつて
宣正つてつてつてつて
刈田なりつてつてつて

合戦一軍法とろじく科水

一て

台徳院殿此命とりくき書事此
備とつとむ

ろ乃くら和泉地の政所職とつ
さごら

大権現此命とらうろ政所職と
あ〜〜め

台徳院殿ろろとらそそまゆ何れ

ろ乃ら物命ろら忠出小

ろろと家元中れる

元和三年十二月從忠位下り

殿一筑後守り何れ

寛永十四年二月六日ろろ死と

六十五歳

在年

にた武尉石見守母は末宮石見守が女

長井大坂御陣乃由は
在る牧野たる先とよび後いふ
所一出陣と

同年五月廿一日在重なる先とよび
後いふ由は下り響となくへたる
一池向と記りし兵士二人ありは
一人は白母衣とけお一半月の
うりのう乃一人を捕連乃う
物とうきる武志あぶみとあ

せく池来るを重捕連のう物と
うきる兵士と響をあせうの
首と討揚たる先陣より捕参
大坂落城のうりあされく

台津院殿よりけ人きりてま川
釣命よりうと湯書院あふ入
うのらは膳番とつとあまう海目
解とれる

將軍家よりけ人きりてま川使

當とほやじ

寛永十六年 御命どうりあり

江戸町奉行とつとむは從五位下

殿一石尾曾小姓と

年宣

二十郎 仁德尉

寛永二年 とうりあり

名徳院殿より 御召り 考てまひる

曰七歳に膳當とほやじ

曰九歳より

將軍家より 所へ考てまひる

小姓組の當とつとむ

年宣

初十郎

十五歳より 考てまひる

將軍家より 御一考てまひる

寛永十年 涉小姓組の當とほやじ

宣親のぶちか

成後なりご

生玉なまたま武藏むさし

寛永元かんえいげん年正月しんげつ從五位下しゆごいげ

一いつ成後なりご守もりのり

同六年十一月どうろくねんじゅういちがつ小宮こみや守もりのり廿五にじゅうご歲

正世のぶよ

基十郎もとじゅうらう

生玉なまたま日ひあ

將軍しやうぐん家いへつつ三さん光みつ守もりのり

宣季のぶき

平へい十じゅう良らう

生玉なまたま日ひあ

守もりのり家いへつつ三さん光みつ守もりのり

宣成のぶなり

心こころ膳ぜん

生國なまくに日ひあ

將軍しやうぐん家いへつつ三さん光みつ守もりのり

家乃故之本紀

却念

廣原もあはれなる系帯を
かたり見えそをわたり
とめすを系帯とたふさぐ
あくわき異なるかた
説くあはれなるこれと
一ふさぐ

孝徳天皇十六代

廣原

孫重衡

文和元年二月廿九日死

法名光性

正原

孫重衡 在位乃らふ正原にあつて

貞安五年二月二十日死す

五十九 法名徳嚴宗祐

氏原

孫重衡 在位乃らふ氏原にあつて

貞永十一年十二月廿九日死す

六十六

教原

孫重衡 在位乃らふ教原にあつて

寛正四年七月十九日
一十八日 法名心月宗光

貞系

孫大島 下野守 又右郎
永享八年閏五月十六日
少一 法名大心宗也

教系

孫次郎 孫大島 下野守 好小為系也

あしこ

室津二氏十二月廿日
四十九 法名回山宗堅

敏系

小右郎 孫大島 又右郎 教系
教系 又あしこ 法名宗権

氏系

孫次郎 孫重尉

系

孫三郎 孫重尉

義政より治久之友に戦回とぬえん

し

永正十二年四月廿日小孫す

五十六 法名宗運

玄系

孫右郎 孫重尉

叔父氏系と不和乃りありしに

よきとて別れしに

今川治政と補氏親より

天文十二年十一月小孫と

五十九 法名宗親

政宗

因幡

来

能也 法名見也

政元

赤野郎 赤野

一ツツは小糸氏政一ツツ人の

一ツツは秀次小

文禄四年七月秀次宗一ツツ

一ツツは一人にたてて城

一ツツは

文長八年

大権現乃御命小

一ツツは

台命一ツツは

一ツツは

女子

中納言 杉房 下 不
寛永六年三月七日 病歿
少 八十二 法名 浄院 日景

女子

近衛 出羽守 毒

同父 左衛門 毒

政成

新 左衛門

京右

七 左衛門

政之

右 左衛門

女子

天方 山城守 道 綱 毒
朝 倉 織 部 正 忠 明
母

女子

元

勅 勅 勅

政明

女三郎

童名牛助

文禄三年

名護院殿より 誅賜し せむるに

元忠

小刑部

政実

右兵衛

美名橋洞をたすげ子なりと政元は

なるこきより七歳のら武列筑井
りどひく五百石乃地とすま

安長十八年十月廿二日小病死と
法名正養理安

子也す

豊明

聖次郎 從五位下 藏部正生 越前
美吉 壬方 山城守 通経 次男 なる
母 朝倉 右衛門 通政 女
安長 十八年 政明 子 たり
これより

名 通院殿の 通令と 通政明が 通

と 通院殿の 通令と 通政明が 通

同 年 十二 月

大 権 現 と び

名 通院殿

将 軍 朝 倉 通 政 明 子 たり

同 年 一 月

将 軍 朝 倉 通 政 明 子 たり

元 和 六 年 五 月 一 日 通 政 明 子 たり

通 政 明 子 たり

寛永元年三月三日乙未
組下厨して御小姓組の番と
所と心

日吉五月三日乙未此列となりて
涉りある番と所と心

日年六月食禄と心

日年十一月武列大丸卿長沼

古沢川平心在回右尾口

と心く千石此心と心

日五年十二月廿日 物命小

從五位下小叙一織部西小

日六年四月庚辰以心

乃心

日元年三月日十五

まゝく涉りある心

つ心

日十五日心

後心

家乃紋
條乃丸
小龜
甲

天正十八年

八本

正重

丸糸束 生國渡河下方加治るる内

八本宮小村

今川氏志一系氏志没落のち

海人少れり

天正十八年

大権現岡東沛入國此也きし古河川
七尾より一属一岡東より一向と
時七尾より子久み所鉄炮回心と
あづり肥前國名木尾小陣家と
正重より久きふ志くひく名
古尾よりゆんこととふ是とゆ
してはねふしうむすて
ゆりく回どなく七尾の死をす
そのら

大権現よりつとをてまひり合澤
沛代いんげん 木介せつげら道のり
台徳院殿よりほくをてまひり
は名 祐芳 玄英

天明

次高在巻 生玉回前
正重よりそのらと井大炊次安飯
射る鳥とひりく

台徳院殿より福一をてまひり
小田原涉代友と 治つては是れ

乃ら

大権現岡東涉下向此と記津系川
小とひく女多 津浪与村越茂助
儀井七平亦と先容少し之
相福一をてまひり乃ら海井
浦沼喜正伯耆守とまひり

將軍家より相福一をてまひり

重縁

源七郎 生國武藏江戶

台徳院殿より所人等をまひり
重朋と原涉代友と 打合せ
らるるまきこり 伊丹播磨守り
命より令澤涉代友と重縁
り 打合せつけられのら海井
浦沼喜正伯耆守と先容少し

將軍家より瑞光寺へ
奉りし書

家乃紋本紙

正勝

八本

田原川内盤 生國甲友

武田信玄とてび勝頼つる是也

とあつる

長江原陣よりとてひる

正成

田孝川平助
猪助小治

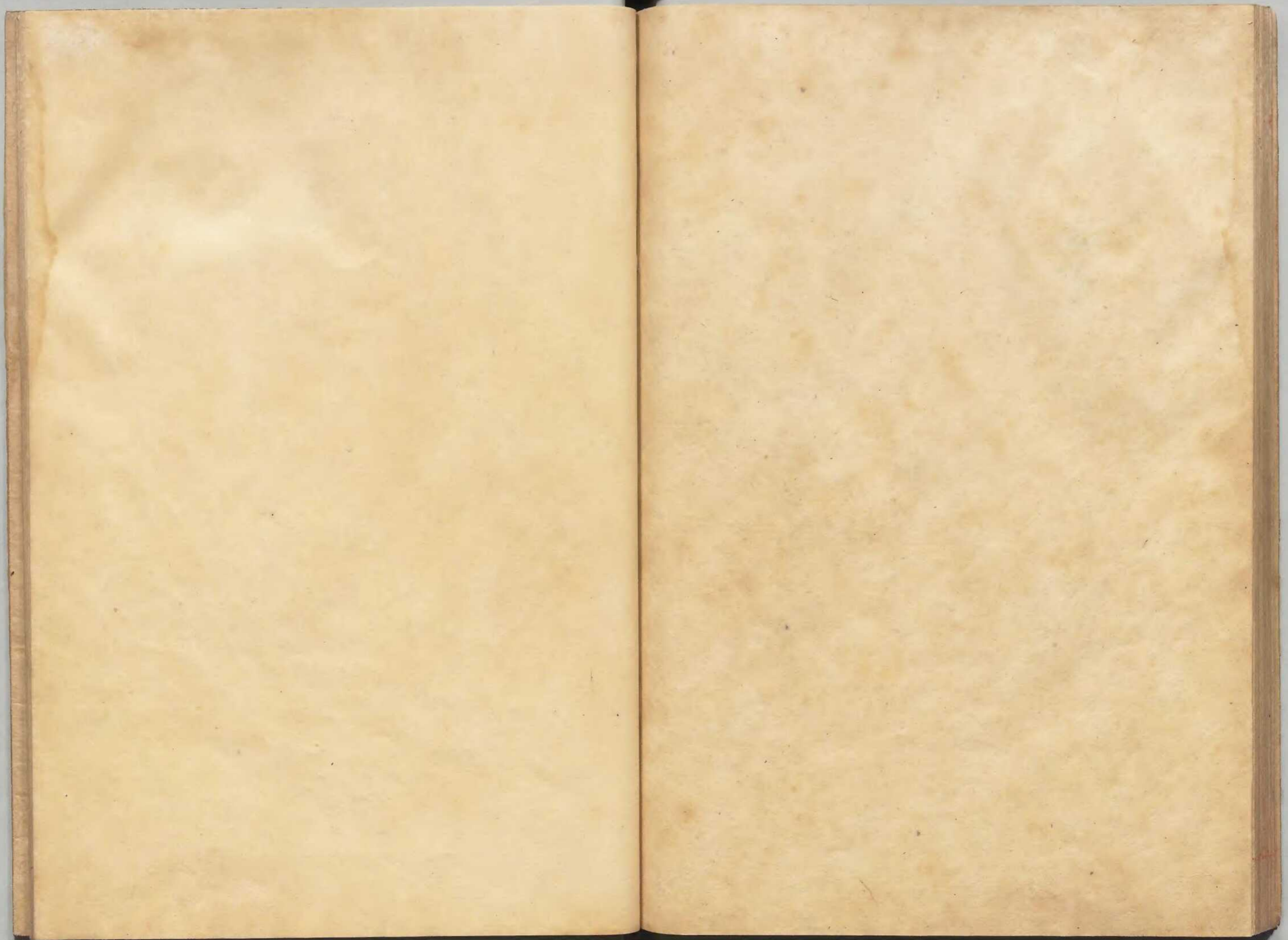
正徳

八木庄兼

な氏と田孝川あり知少あり
父よりとこれ八木友と高長子也

な氏あり八木氏とある友を部
死をのら母方乃祀父川神庄兼
る長育せしむ
將軍あり一福きそまらる

家乃紋凡の内小徳



来

坂本

生玉

前場
氏
船倉の流

勝秀

台
入道
一
く
入
号

生國城前

信長ととむ秀吉より信長の

大指現

台酒院殿より信長をきてまひる

元和六年三月二日つるふ記とは名録

勝政

久之郎 生玉山城

大指現より信長をきてまひる大坂御

陣より信長の

台酒院殿より信長をきてまひる

信小姓組の番とつとむ

勝吉

信長 生玉山城伏見

寛永九年

將軍家より信長をきてまひる

勝門

久三郎 生玉武乾

將軍家より流人者にてまのり

家乃紋敷丸式ハ敷也

定好

興古書

生國尾張

日下記

姓戸録いく用比て官に
 室子産湯能余乃後たりる
 先祖何心はるる瓦列るる
 年代つまひ難うらむ

三列えいりゅうよりとひく

大権現おほごんげんよりほくをまてまひるはなむ

少家すけいけよりまゝ代友しろとも取とならむ

伏見ふし見よりほく

安長やすなが五年ごねん開原ひらき御陣ごじんのち

少見すけみの城しろ留とどり居ゐ番ばんとほく

元和げんわ二年にねん少すけみよりとひく
病死やまひに七十五歳しちごじゅうごさい 法名ほふな常越とこえ

宗好むねよし

大隅おほすみの守もり 生國なまくにをい

大権現おほごんげんよりとひ

名徳院なとくゐん殿のりよりほくをまてまひる

普請ふしんなむりとならむにたかく地盤ぢばんと

きづく乃ちらりり留とどり居ゐ番ばんと

なる

寛永十年七月死と六十歳

法名宗傳

定勝

右馬允

生國武藏神取

右徳院殿とよむ

將軍家より流之者とまはり

寛永十八年十月死とす

四十九

定久

日下郡半助生を江依和山

なる先定勝が長子なり実父和村

権左衛門久次甲州府中

生流いさむ井伊掃部頭

流ふ

寛永十一年定久

將軍家より流るる

正冬

河内守

生國甲斐

台酒院殿より近侍と乃ち抄之

て筆紙す

寛永二年より遊

正定

作十郎

生國武藏

寛永四年より

台酒院殿より近侍と

宗正

兵衛

生國曰あ

台酒院殿と

將軍がより近侍と

定音

卷八

生國武苑

寛永十一年

將軍家より侍人等々

家乃致格乃業

● 某

十卷末 生國三河

大権現と云ふ

台座院殿より伝ふ事

目下

来

十策 生玉回矣

台德院殿より詔之奉てまゐる

宗勝

叔九郎生玉回矣

大権現とてい

台德院殿より詔之奉てまゐる 大坂 大坂

城乃涉り是なり也

宗忠

叔九郎 生玉武苑

元和四年

台德院殿より詔之奉てまゐる

同九年

將軍家より詔之奉てまゐる

宗重 むねしげ

甚九郎 たか 生國曰あ

將軍家よりは久き事とす

家の紋丸乃目小兼 あやむら

